

2021年10月7日（木）

老球の細道634号

バスケット三昧の一日

会津バスケットボール協会 室井 富仁

10月3日（日）は幸せな一日であった。午前ミニバス、午後中学校、そして夜は日本女子のワールドカップアジア予選決勝とバスケットボール観戦三昧だった。レベルに応じた観戦感想を述べてみたい。

【ミニバスジュニア大会会津地区大会】

大会予選リーグのいくつかの試合を観戦した。メンバーのそろっているチームとそうでないチームとの差は歴然としていた。特にオールコートデイフェンスに対してボール運びができないチームは大差で負けていた。発展途上チームが必ず通らなければならない通過儀礼はプレスデイフェンスに対するボール運びである。このプレイが満足にできないと、フロントコートにボールを進められず、まともにシュートもできないで終わってしまう。

この問題を解決するには、ファンダメンタル、基礎体力（走りっこ）、そしてスローインからのインバウンドパスルールを日々練習することである。なるべくゲーム化し、楽しく、競争的に練習するドリルが必要である。選手は何度も何度も失敗するであろうが、コーチが我慢強く、丁寧に、励ましながら、笑顔で指導することによって必ず解決する。

【U-15 中学校会津地区大会】

中学校はチームによってミニバス経験者と中学校初心者の玉石混交のチームが多い。十分な指導がなされないとその差は埋まらないが、適切な指導によって差は改善するものである。どんな選手でも試合経験を積んで上達する。できる限りゲームでコートに立たせたい。

いつまでも選手やコーチが「初心者だから」と「決めつけの刃」を向けていると変わらないし、変わらない。同じことを1年も経験すれば「初心者マーク」を外さなければならない。

トランジションオフェンスはある程度少数の力のあるプレイヤーで解決するが、ハーフコートオフェンスやデイフェンスになるとチーム力が必要になる。初心者、経験者共にチームルールに従って同じように動けなければならない。日頃の練習あるのみである。

【ワールドカップ女子アジア予選決勝】

ウイスキーを飲みながらの女子決勝戦観戦は至福の一時であった。東京五輪からヘッドコーチとプレイヤー数人が変わっていた。案の定、接戦勝利でなんとか決勝まで上がってきた。何度もリードされてあわやという場面が何度もあった。その度にデイフェンスとリバウンドでしのいだ。特にインサイドのデイフェンスのしつこさは、相手センターに自由にプレイさせなかった。デイフェンスリバウンドの強さは、相手にセカンドシュートをさせないことにつながった。それによって点差が広がらず、再び逆転する流れを作ることができた。オフェンスリバウンドも負けていなかった。

身長差はあってもデイフェンスの激しさとしつこさ、そしてリバウンドへの執念で身長差は克服できることを、日本女子チームは東京五輪に引き続き再び教えてくれた。